

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

毎日眺めてもよい救い主です



あらためて主の降誕おめでとうございます。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（1・14）ここにお集まりの皆さんは、「誕生の喜び」を特別に知っている方々だと言えます。夜半のミサでご降誕を祝い、翌日の日中のミサも続けて来てくださっているからです。

中田神父は経験できないことですが、自分に家族がおられて、誕生の喜びを分け合ったことがあるなら、新しい命がずっと見ても見飽きないという経験を持っているのではないのでしょうか。鯛ノ浦に住んでいる私の母親は、妹夫婦に男の子が生まれ、祖母となった時に、毎日見ても見飽きないと、素直に喜びを表していました。

毎日眺めていると、小さな変化にも気がつくことでしょう。日々の成長を、細かく記憶していることでしょう。その体験は、今日ご降誕の日中のミサを祝うために大いに役立ちます。なぜなら、救い主としてお生まれになったイエスは、これから日々成長して、神と人ともに愛されるようになります。

私たちは、昨晚に続けて幼子イエスを訪問に来たのですから、イエスの成長と共に、私たちも前に進んでいきましょう。イエスは神殿に奉獻され、幼いときに命を狙われ、エジプトに避難します。12歳の時には神殿で学者と議論します。

さまざまな場面が、人となられた神の子の成長を確かめる場所です。私たちは、その一つ一つの出来事にミサの典礼の中で立ち会いたいと願っているのでしょうか。それぞれの出来事に私たちが立ち会うなら、私たちにとっても霊的に成長する糧をいただくことになります。

降誕夜半のミサで、具体的には触れませんでしたでしたが、何十年もルカ福音書の誕生物語を朗読し、説教しているわけです。その中で「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」（ルカ 2・7）これはどういうことだろうと毎年考え抜くのです。

たまたま、宿が満席だったのでしょうか。面倒を避けたくて、宿屋が泊めさせてくれなかったのでしょうか。金持ちが何部屋も貸し切って、宿を取れなかったのでしょうか。中田神父が20代30代だったとき、面倒を避けようとしたことは想像できませんでした。金持ちが何部屋も貸し切ったかもしれないという発想は、50代になるまで浮かびませんでした。けれども想像したどの理由も、人間の世の中ではあり得るのです。

何十年も思い巡らして気づくこともあります。だから、イエスの一つ一つの出来事に、私たちもついて行くことは意味があるのです。毎週あずかっているミサは、同じ事の繰り返しですが、何年何十年と参加して参列者が気づくこと、ミサをささげる司祭が気づくこともあるのです。

日中のミサで朗読されたヨハネ福音書の始まりの部分も、何十年も朗読してきましたが、今年、初めて次の箇所が目が留まりました。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

に恵みを受けた。」(1・16) とっくにこの箇所が目が留まり、取り上げていてよいはずですが、この歳になって特別に目が留まったのです。

今年のクリスマス、一人の神父様は大腸がんという大病を患った中でミサをおささげします。だれがそんなことを想像できたでしょうか。けれども私は、ヨハネ福音記者が捉えた「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」このメッセージは今年のためにあると、信じたいのです。

わたしたちの間に宿られたみことば、イエス・キリストのおかげで、例外なく皆が、恵みの上に、更に恵みを受けた。絶対にそうなんだと、言い聞かせています。あなたにとって、おいでくださったイエスは毎日眺めてもよいと思える救い主でしょうか。来年また見に来ます。そのような存在でしょうか。今日ここにお集まりの皆さんは、毎日眺めていたい、毎日私の心に留まっていてほしいと願っている、そんな皆さんに違いないと信じております。

聖家族(ルカ 2:22-40)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。